



A TREASURY OF JAPANESE LITERATURE

日本の文学

44

野上弥生子
網 野 菊

中央公論社

野上弥生子
網野 菊

昭和40年10月5日初版発行
昭和48年12月15日10版発行

発行者 高 梨 茂

本文整版印刷 三晃印刷株式会社
扉・函貼印刷 株式会社トープロ
色刷口絵印刷 株式会社大熊整美堂
口絵写真印刷 株式会社トープロ
本文用紙 本州製紙株式会社
クロス 日本クロス工業株式会社
製函 文京紙器株式会社
函ボール 佐賀板紙株式会社
製本 協和製本株式会社

発行所 中央公論社

東京都中央区京橋2丁目1番地
電話(561)5921(代) 振替東京34

目次

野上弥生子

秀吉と利休

茶料理

哀しき少年

網野
菊

別
れ

風呂敷

7

284

302

319

323

憑きもの	333
母	339
冷たい心	359
実績	373
金の棺	376
赤いカーネーション	406
ひとり暮し	438
さくらの花	447
高砂	480

注 解
説 年 譜

口 絵
挿 画

平 野 謙

「秀吉と利休」 真 野 満

「秀吉と利休」 真 野 満

「風呂敷」「母」「冷たい

心」「金の棺」「ひとり暮

し」「さくらの花」

緑川 広太郎

523 502 484

野上弥生子

秀吉と利休

一

堺の家では、朝寝も利休には愉しみのひとつであつた。とりわけその日は、まえの夜おそく帰りついたくたびれもあり、晩春の熱量のました太陽が軒のすかし窓を通し、部屋の障子のひと枠、ひと枠を黄じろく染めるまで、おもしろい寝ぼろをした。

それもきまりで、起きると朝湯の用意ができてゐる。土地らしい潮湯のむし風呂である。粗らいすきまのあつた床の下から吹きあがる潮の香の強い湯気は、まあたらしい縫を通して、浴槽いっぱいにもうとたち籠めてゐる。狭い戸は、大男で七十に近づきながら骨格、肉づきに衰えない利休には窮屈すぎても、なにか開き口をはいるような身のこなしで上手にもぐりこむ。はおつた麻の浴衣は洗布でもあつた。冬でもないかぎり長くははいていないが、からだはたんねんにこすり廻す。熱し

た塩分の浸透は、肢体から関節のふしぶしまで軋めし、なおまた湯気でねっとりした皮膚に、板敷の大だらいの水をさぶさぶ浴びる爽快さはいいようがなかった。

ぬぎ捨てた浴衣とついのもう一枚が、隅の籠にはいつてゐる。利休は濡れたはだか身にひっかけ、今度はそれで全身を拭きとつてから、極楽、極楽、といいつつ向う側の仕きり戸をあける。鏡台や衣桁のおかれた小部屋で、着がえを膝において待つのは後妻のりきであつた。

「昨夜とは、うってかわつたお色つやになりました。」

「たつがたつまで、片時も暇なしでね。」

「そんなにお忙しくては、おからだにいかがでしょう。」

「御用だからな。」

聚楽第内に住むようになってからは、朝湯はおろか、利休は床にもゆっくりはしていられた。秀吉は時刻がまわず現われた。場合では前触れもない。虚をついてやろうとする意地わるもひそむが、大事な話をおもいつくと、待てしばしのない性急さで、密談には都合よい茶室をえらぼうとする。利休が三千石の茶頭にとどまらず、政治むきのことまで関白の相談相手であるのは、遠国の大名たちにまで知れわたつてゐた。

とにかく、いつなん時とびこまれてもよい準備を怠るまいとしたので、利休屋敷はあたりの家々にくらべてはことさら朝が早く、利休自らにもおきぬけの仕事が多か

った。

禪においては師、茶道では弟子格、また堺いらいの無二の友である大徳寺の古溪和尚が筆をふるった、「不審花開今日春」の墨蹟から不審庵と呼ばれ、それが屋敷の名にまでなっている四畳半と、いまひとつ三畳台目の茶室は、清掃からしつらえに人手をかけさせなかつた。わけてもゆるがせにしない火入れは、炬、風炬を問わず、その日その日の照り、曇り、季節によつてかわる湿めり、乾き、風のあるなしで、交える粒灰の分量から木炭かざりまで日毎にかえた。七十に近づいて皺ばみ、油っ気もない手が寒あいだは婢女のように荒れている。またその手は、大男といえるからだに似て大きく骨太でありながら、ひとたび点茶の座につくと、別なものになつていようもなく華奢に動く。茶室の掃除も点前も別事ではなかつた。とはいへ、毎朝の雑仕もひとしく茶道の精進として純粹につつましく行つたろうか。そうであり、それでもなかつた。彼の意識の底にはつねに秀吉があつた。いつ姿を見せようと、待つていたような迎え方がしたく、相談事なら、ちやうど予期していたような受け答えがしたく、茶室に通るなり、ここで朝飯を喰おうか、といひだされても、一向にまごつくまいとしたのである。気分次第で、秀吉はだしぬけにそんなことをいう。またこうした場合、わざと藤吉郎時代の尾張訛りをむきだしに

して親愛の表現にするが、その調子に乗つてはならず、こちらは常にもまして慇懃に振舞わなければならぬ。

利休が堺に戻るのには、これらの生活からの逃避でもあつた。ことに今度は半月まえの後陽成天皇行幸につづいて、盛儀に列するために上京した諸大名のため、聚楽第ではたえず茶事が催され、明けくれ気の休まることがなかつたから、家居でしばらく寛ろぎたかつたのである。

町家のことで、一方は土蔵になる細長い庭には日光がみち、女竹の茂みが、白壁にそうてほとんど黒くけざやかに浮きあがつている。低い四つ目垣のしおり戸を押し、裏へまわれれば、茶室の露地になる。利休は湯あがりの、太い爪の目だつ素足で廊下に佇んだまま、苔の青い飛び石のひとつひとつを、向うの隅の、竹簀の子に蔽われた古い井戸までじゅんじゅんに数えるような眺め方をした。そばに一本あつて、冬の花を寂しくつけるわびすけによつて、それは椿の井戸と呼ばれている。いったいに水質の粗らい堺の土地にしては、めずらしくよい水で、二丈近くも深い底から汲みあげるのにちよつと手際がいるにしろ、利休には天与の賜物であるのはいうまでもない。「七夕の井戸浚えには、ついでに井桁もとるかえるか。」方型の厚い木組みの角々が水さびで青ずみ、なかはもう空洞らしく潰れかけているのに最後の視線をとめた彼は、そう独り言につぶやいたのみで庭にはおりず、離室

のほうから水屋をぬけて茶室にはいった。

二疊台目の席としては、ここがはじめての工夫であつただけに、くぬぎの歪み柱一本にも彼には思いいでが深い。隅り口の内側の半畳、その北の、これも半畳とのさかいですでに炬に代つておかれた風炉の口は、火のみだれ過ぎないように土器でふさがれ、名残りの香のかすかな匂いのなかに、あられ釜がほんの一きれ足す木炭を待ち、いまにも鳴りはじめようとする一瞬まえの静けさで、ひっそりとかかっている。灰の拵えもおもしろいに違いない。床掛けは伝宋汝志の淡彩の牡丹で、ほんの小幅ながら、利休がもつとも愛している唐画の一つであつた。

利休は道具畳をぬけ、待合からつくばいまで眼をくばつてから、りがが朝餉の用意をととのえている座敷に戻つて来た。彼はなにより先きにきいた。

「今日のしつらえは御前か。」

「紀三郎でございます。」

りがは末子で、生さぬなかの長男紹安、また後妻にはいる時連れ子にした次男少庵、そのほかに三人ある娘のあとに生んだ末子の名前をあげたついでに、今朝早く出入りの頭梁が、浜河岸の納屋の修理の話でやつて来て、紀三郎もいっしょに現場に出掛けたむねを伝えながら、「そんなわけで気忙しいしうにいたしておりますから、不行届きなことでございましたでしょう。」

「紀三郎が本気にやれば、兄たちに劣らぬものになれるのだがな。」

「それがあの通りですから、いったい、どんなつもりなのか、あのこのことだけは、私も手のつけようがございません。」

利休とは年齢も二十あまりのひらきがあるのみではない。華奢に小柄で、藍地小紋の袴に、はやりのびろうどの襦袢の襟をのぞかせた、いつまでも若女房めいて匂やかなりきの頬が、ふと雲のかげが落ちたように曇るのはこの息子の話がでる時であつた。

でも、そのことには利休はもう触れようとせず、箱膳の蓋をあけた。一人分の食器のおさまる黒塗りの古びた器具は、若い時からのものである。家に帰っているあいだはいまだに用いており、それもふるなじみの大ぶりな飯碗と、象牙の箸を自らとりだすと、りがはこぶだしで味よくこさえた粥を土鍋からよそつた。朝はこの粥に時の野菜の煮ものが一皿、それに漬物ときまつていた。

「浜河岸の手入れも、そろそろ片附くふうかの。」

「さあ、いかがでございますしう。納屋も古いほうは土台からの取りかえだと申しますから。」

「とすれば、まだ当分は仕あがるまい。」

「それにこの節は大工、左官も大阪のほうへまいりたがつて、使いにくくて困まると頭梁がこぼしております。」

「ふむ。」

利休は熱い粥をゆっくり食べた。

堺の浜は、大和川の河口から南へかけてまっすぐに伸びた海岸であつても、古くはちぬの海なる大阪湾のひろびろした水の袋の一部だから、波はしずかでだぶだぶと青い。向う側の四国、中国、九州路からはもとより、紀淡海峡の早い潮をきつて、伊勢、尾張の船まできそい集まるあいだに、船艫を派手やかに彩色した唐の大船まで出入りした。しかし、倭寇の跋扈やその他の纏れで、宋、明との直接取引がとだえ、それに代つた南蛮船をばてれんといつしよに九州のキリシタン大名が膝もとに抱えこむようになってからは、博多、長崎がこの古い開港地の繁栄をおびやかした。とはいへ、紅毛碧眼の商人がつんで来る生糸、絹、綾、緞子、びろうど、毛皮、宝玉、紫檀、黒檀、なおさまざまな珍らしい食べものといった奢侈品から、いまの合戦にはなくてはならない鉄砲の弾丸になる鉛、硝石の軍需品の売込み、またもつとも利潤の大きい買ひものとする銀をはじめ、漆器、その他の雑貨の集散では、堺は京、上方をひかえた地の利もあり、なお安南、ルスンも瀬戸内の氣でいた商魂を容易に失ひはしなかつた。

南蛮船がキリシタン大名の港に来るのは、年に一、二度にすぎない。その時にそなえて買ひあつめ、また彼ら

から買ひこんだ物資の保管には、安全な設備をもたなければならず、必要は、内地の諸国を相手の商売にもかわりはなかつた。それ故、堺の町の富商たちは、いわゆる納屋衆の名で呼ばれる倉庫業をいとなんでいる。海岸ぞいにそれぞれの店の名前、屋号を高い破風の下に紋章ふうに大きく書いた土蔵が、ふつうにはまだ板葺きが一般なのに、そこだけはおもしく瓦屋根でならんでいるのは、彼らの富の標識でもあつた。たえまない入り船、出船、あるいは一仕事終つたかつこうで帆をおろし、むきだし帆柱を、なにか冬木立のように林立させた親船、そのあいだをはしっこい腕白児のように漕ぎまわる伝馬、荷役の仲仕と船頭の叫びあう胴間ごえ。これらの粗らい動的な水上の殷賑は、倉庫の白壁の列や、青く光る波との交錯において、古い貿易都市の貫禄をまだ活き活きと示すのである。

利休も納屋衆の一人で、家業は魚屋であつた。でも、堺の目貫きにならぶ魚棚の商人とはちがひ、網元をかねた塩物問屋だから浜の倉庫の大切さは貿易商に劣りはない。ただ品物が品物で、彼らのような派手な儲けは望まれず、なお大阪の築城からは新しい町に押えられがちで、りきが噂する大工、左官どころではなく、一尾の魚でも大阪のほうが値がでるから、古い関係の漁船まで堺を素通りしかねなかつた。しかし先代ほどにはことがいかな

いのは、それだけの事情ではない。いまの彼は、魚問屋の主人よりは秀吉の茶頭であり、そのうえ、顧問役にひとしかった。後妻のりきは利発な女で、金春流の能役者の家に生まれただけに、謡、小舞のたしなみはもとより、茶の湯も夫とともに京に住むあいだは、大政所、北政所のないないの稽古に御相手をするほどに堪能ながら、家のなりわいに采配のふれる質には遠かった。

長男の紹安、次男の少庵はともに茶人となっている。

それに紹安は、父と同じく茶頭として五百石を食みながら、リュウマチ性の足の痛みが持病で、いまでも有馬の湯に出養生をしているありさまだから、家業をつがせるとすれば、紀三郎よりほかにはない。ところでよい男前で、利かぬ気のあたまの鋭い十八の若者は、帳場におちつくつもりはなさそうに見えた。また父や兄たちの茶は、わび数奇よりいささか物好きだ、と憎まれ口をきいたりする癖に、点茶の座につかせれば、いつこれほどの腕になったかと感嘆させないではおかしい。母の兄で、それも能役者の鳥飼弥兵衛は紀三郎の容貌と声柄に目をつけ、いっそ、自分たちの道にはいる気はないか、芸も叩きこみ次第で、いまからでも立派なものに仕あげてやろう、と誘うが、それくらいなら隆達節をやる、といつてのけ、居間にしている裏座敷のほの暗い壁にもたれながら、堺にはじまってこのごろは京、大阪まで流行っている意気

な小唄を、聴きおぼえとは思われない巧みさで低唱する。今日とても普請場からまっすぐに帰って来るか、どうか、わかったものではなかった。久しぶりに家にある父への手前をおもい、出しなに釘をさしておいたのではあるが、むしろ、紀三郎は父を避けるために、わざと普請場へ行つてしまつたのであろう。この一、二年、めだつて扱いにくくなつたのみでなく、五十近くでえた子供だけに情愛もいっそう深い父に対して、こと毎にそつぽを向く傾向がつのるのを、りきは母親の勘で見のがさなかつた。幸いに利休は、紀三郎がちょっとした言葉に示す反抗も、いっそ隔てのない甘えか、若いころのやり場のない突っかかりとしかおもつていないように見えた。

「あれにも、そろそろ身をかためさせたほうがよい。」

最後の一口は湯漬けにして、箸をおくといっしょに、なに気ない風にそういいだした夫を、りきはおはぐろの艶々とした前歯を淡あかい唇にのぞかせて見あげた。彼もほかのことは考えていなかったらしい。

「その気になってくれれば、安心なのですけれど。」

「どこかにいい交した女でもあるふうかの。」

「べつにそんな様子はございませんようで、鳥飼の兄なぞは、かえつていけないことを申すくらいですわ。」

「どういいなさる。」

「紀三郎はつまらない相手にうつつ抜かす男じゃないか

ら、当分好きなようにさせておけ。思いきり遊ばしたほうが、彼奴はもつとからりとなるなんて。」

利休はまだ肉のおちない艶のいい頬のいっぽうで、ほろ苦くわらった。義兄は彼らしい治療法をいうのである。

金春流の先代の家元喜勝の弟子であったのが奈良から流れて来たかたちで堺に移り、とにかく、いっぽうの能役者の地位をこさえあげるまでの弥兵衛の若盛りには、

この道の修行ではなよりの禁制たる好色、博奕、大酒のうち、第二の誠しめは別として、あとのものへの惑溺

は誰にもひけはとらなかつたのだから。でも、利休はそれをいいだそうとはしなかつた。りが下婢を呼び、い

つしよに膳をさげて部屋を去つたあとも、もとの座を動か

かなかつた。かたちのよい大きな坊主あたりに似あつた、二眼目のまるい大きな眼を、どこを見るとはなく眇める

ようにして、厚い唇を左寄りにくいしめている。考えごとをする場合の癖である。利休は十八の紀三郎をおもひ、

またその年ごろの義兄の放縦な振舞いにくらべれば、同じ意味での若い時代というものは、自分にはなかつたに

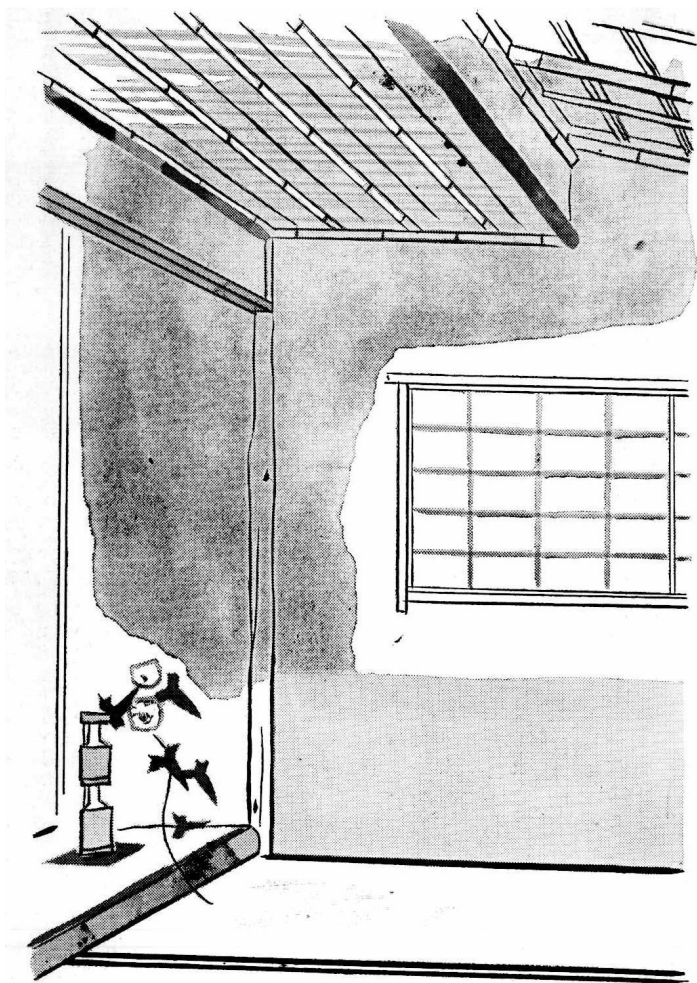
ひとしいのを思いめぐらしていたのかも知れない。

まことに、与四郎の名で呼ばれたほんの少年で、舩松の道陳に東山流の茶法で手ほどきされて以来、彼が生きたことは学ぶことであつた。そのあとに師匠とした武野紹鷗からは、連歌師であつた彼の歌道、茶道といったの

悟りとして、古い仕方を守りつつ、つねに新しい作意をするのが茶湯であるのを教えられた。また、紹鷗の先達で、一休の弟子で、彼からえた「仏法も茶湯の中にある」との一語に生涯を貫いた珠光への傾倒は、しだいに紹鷗をのり超えさせた。思えば与四郎が千の宗易となり、またいまの利休となり、なお飽くまで利休であろうとする今日までの茶道一途の精進は、「藁屋に名馬をつなぎたるがよし」の言葉で珠光が喝破したものを守りつつも、なお自分だけの創意と工夫で、あたらしい茶の世界をうちたてようとするところにあつた。はじめ仕えた信長の死で、かわつて秀吉の茶頭をつとめることになった時、彼のために建てた山崎妙喜庵の茶室待庵は、すでに紹鷗でも珠光でもなく、利休がはじめて利休でありえたわび数奇の理念を、しかと眼に見えるものに仕遂げた見本でもあつた。

とはいへ、珠光の直弟子たる粟田口の善法が、闘茶の遊樂、書院台子の茶の儀礼化を、師匠が侘びの一筋で質的に変貌させた以上に、彼自らは藁屋、名馬をさえ放下し、かん鍋一つで茶湯も愉しめば、食事ごしらえもした透徹には利休はまだ距離があつた。しかもそれが彼の懈怠の故ではなく、かえつて積極的な獨創性にもとづくところに、利休の根ぶかい矛盾がひそむ。

妙喜庵の待庵で、いままでの茶座敷の六畳、四畳半を



はんの二畳に圧縮し、出入りには、漁家のくぐり戸から
 思いついた蹴り口で這い入り、這いでるだけの空間しか
 あまさず、壁には、藁すさの粗ら粗らしい土を塗ること
 で調和美を全うするとした彼が、いっぽうには黄金の茶
 室を建てたのである。三畳一間の天井、壁、床、柱の
 ことごとくが金、あかり障子の骨までが金、畳は猩々
 緋、縁は紺地の金襴、それに道具も茶入、茶碗、盆、茶
 杓、蓋置から、水こぼし、火箸にいたるまで黄金づくめ
 で、ふくさも金襴が用いられた。なおこの建物はその社
 会的な名譽をもつくりだした。つねは大阪城内におかれ
 ていても、組みたて式にできていたから、天正十三年九
 月七日、秀吉はそれを禁中に運びいれ、正親町天皇をは
 じめ、親王たちを客として金屋の茶会を催した。その時
 献茶の儀に参じさせるため、布衣の宗易に利休居士の賜
 号があり、それ以来その名を名乗ることになったのだか
 ら。

もとよりこの茶座敷は一世を驚嘆させた。秀吉にとっ
 てはそれが狙いの一つであつたに違いない。聚楽第の南
 門に、三十万五千兩の金銀を二回にわたつて積みかさね
 諸侯、諸大夫に気まえよくくれてやつた金配りにひとし
 く、黄金の茶室も、無尽の富と權威を誇るにはちやうど
 よい道具であり、大阪城に伺候する諸国の大名たちは、
 拝觀を許されただけでもとくべつの恩寵として土産話に

した。

こうした有様のあいだにおいても、ひそかな物議が
 もされないではなかつた。彼の草庵露地の侘び茶の理念
 が、金びかの茶室でどう生かされるかであり、この疑い
 をもっとも強く抱いたのは利休の一番弟子で、いまは秀
 吉の勘氣を蒙つて所払いとなつてゐる山上宗二であつた。
 同じ堺の茶湯者の中でも、宗二はとりわけ生一本で、師
 匠の利休を珠光につぐ名人とは信じながらも、彼をはじ
 めとして自分たちまで、本来はひたすら修道の方便たる
 べき茶湯を、生活のたずきとする本意なさをつねづね嘆
 いていたのだから、黄金の茶室への反感も烈しかった。
 秀吉の金びか趣味に対する利休の迎合、妥協にはかなら
 ないとなで彼は思うのである。

利休には、宗二の不満や疑惑はわかりすぎるほどわか
 つていた。また宗二が、腹にためたまままつ向うからぶ
 つかつて来ないのは、論議のたねにするのも厭わしい
 ほどに思つてゐるのを見ぬきながら、自分から問題にし
 ようとはしなかつた。ひとが善く、純粹であるだけ、幾
 分えこじで、一度あたまに染みついたことは、容易に剝
 ぎおとせない宗二に、利休のひだの多い考え方を飲みこ
 ませるのはむずかしい。同時にそれは少年与四郎で道陳
 に学び、紹鷗をこえ、珠光に導かれつつ歩いた茶修行の
 遍歴のあいだに、つねに利休のこころの底にあつた二つ